

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号： 1 4 6 0 2

研究種目： 奨励研究

研究期間： 2021 ~ 2021

課題番号： 2 1 H 0 3 9 4 8

研究課題名 教育の当事者としての子供は幼小接続期をどう意味づけているか - 児童・生徒の語りから

研究代表者

松田 登紀 (Matsuda, Toki)

奈良女子大学・附属幼稚園・国立幼稚園教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 410,000 円

研究成果の概要：本研究は、就学移行を経験した当事者としての子供が、小学生となった今、現在の生活や学習を経る中でどのように幼小移行期を振り返り、「小学生になること」をどう意味づけ自分の経験としているのかを、彼らの語りから明らかにすることを目的とした。この結果、協力者達は「小学生になること」について、具体的な成長モデル、○具体的な環境の変化、○小学校文化、○幼稚園との比較対象、○ポジティブな感情対象、○ネガティブな感情対象、○強制感・外的プレッシャー、○「大人」概念の下位項目、○変身、○自伝的記憶の再構成、○漠然とした自己理解、○全能感、○社会構造の一つ、と意味づけていたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本での幼小連携接続課題は子どもにとっての必要以上に、学校制度としての都合から生み出された課題であるが、そこで、経験した者としての当事者の声に基づく研究が展開されることに本研究の意味がある。つまり、幼小連携接続の「段差」「適応」というドミナントストーリーに、人生の重要な発達プロセスとしての幼小移行期、という新たな視点を提供するものである。

研究分野： 幼児教育学 臨床教育学

キーワード： 幼小移行期 幼小連携接続 小学生 教育当事者 子供の声 ナラティブ アイデンティティ 質的研究

(2) 具体的な環境の変化（両項目）

- ・空間的拡張とともに集団規模の大きさの変化と捉えている。
- ・友達も学習も比例して量的な豊かさで語ることで「小学生」が表現されている。
- (3) 小学校文化を含んだ語り (両項目)**
 - ・小学生である「いま」だからこそ知り得た情報がかつてを遡って入り込む時間の逆行的構成の語りである。
 - ・多くは「勉強」「宿題」ということばで語り、「小学生」の特徴を具体的に表現する。
- (4) 幼稚園との比較 (両項目)**
 - ・1学年進級するという観点から幼小移行期も同様に捉えることで比較を行なっている。「小学生になる」ことを想定する際に、幼稚園期の「年中から年長になる」経験を軸に想定したもの、「小学生」が「6年生と同じ」枠組みであることから、その違いについて意味づけている。
 - ・特徴的であるのは、想起していた「小学生になること」とは「違った」と意味づけた子どもの語りにのみ、二項対立的語りが見られたことである。ここには幼稚園と小学校を何らかの上下関係またはネガティブな感情を背景として捉えていると考えられる。
 - ・決められたフレームが数多く存在するようになった小学生の「いま」と比較して、振り返れば幼稚園期には「なんもなく」と意味づけており、「小学生」が意味づくことで、幼稚園を語ることが可能になっていることがわかる。
- (5) ポジティブな感情 (両項目)・ネガティブな感情 (「違った」のみ)**
 - ・いわゆる幼小移行期におけるドミナントストーリーでは「幼児と児童との合同の活動を行うことで安心感をもつ」(国立教育政策研究所, 2005)とされているが、本カテゴリではそれを覆す結果となった。
 - ・ネガティブな感情をもちつついかに「小学生とな」っていったのか、そのオルタナティブな物語についての詳細を今後明らかにする必要がある。
- (6) 強制感・外的プレッシャー (「違った」のみ)**
 - ・強制されている経験や期待に答えられないプレッシャーを協力者が感じている。
- (7) 「大人」概念の下位项目的理解 (両項目)**
 - ・「いま、ここ」にいるはずの自分が、周囲の強固な未来志向の時間意識を受け、学校・社会システムを渡っていくための制度的な言説に取り込まれている。
- (8) 変身願望 (両項目)**
 - ・転機や移行期など大きな環境の変化をこれまで経験したことのない協力者は、今の自分とは何か違うものへの変身として捉えている。
- (9) 語ることによる自伝的記憶の内容や意味づけの再構成 (「違った」のみ)**
 - ・記号の意味であった「勉強」が存在的意味となったことを示している。
 - ・幼小移行期について他者に語ることがより自我を統一する「力」となっている。
- (10) 漠然とした自伝的記憶の内容や意味づけ (両項目)**
 - ・このカテゴリの特徴は幼小移行期が協力者の人生にとって今のところ特に大きな意味をもたないことを示している。
- (11) 全能感 (両項目)**
 - ・幼児期の特徴でもある全能感からくるものである。
 - ・現在の学校システムが「強さ」志向に陥っている影響が早くも幼小移行期の段階で見られるという可能性も含んでいる。
- (12) 社会構造からの理解 (「変わらない」のみ)**
 - ・社会的存在としての「小学生」の経験が、確かな実感として協力者の理解となっている。

これまで幼小移行期という経験について、我々専門家が専門的判断の理論的枠組みによって規定の語りだけを選択的に聴いてしまうことで「語られているのに聴かれない物語」「聴こうとしてこなかった物語」が存在したことを明らかにした。いくら幼小交流を重ねたところでポジティブな感情だけで就学するのではないということ、ネガティブな感情やプレッシャーは未経験な事柄に対する不安、ということだけではなく、「将来のためにいまを準備する」心性に囚われた大人に起因するものの可能性があること、アイデンティティの視点から見れば、幼小移行期について語ることが自伝的記憶の再構成的想起となり、結果的に幼小移行期に不安定になる自己の同一性や連続性を維持することを支える可能性があることなど、これまでのドミナントストーリーを問い直す複雑で多様な視点を得た。

総合的に考察すれば、協力者の「小学生になること」は小学校との交流など過去の具体的な小学校文化に関わる体験だけが意味づけているのではなく、生活の中で触れる社会的構造からの理解や、学校・社会システムの文脈から受ける強制プレッシャー、未来志向の時間意識からの理解も関わっていることが明らかになった。この結果は今後、幼小連携接続においてどのような経験が必要か、という経験内容についての研究とともに、幼小移行期をアイデンティティの同一性や連続性を維持する能力を支える一つの環境として捉えるような初等教育の展望そのものの研究を必要としていることを示しているのではないかと考える。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1．著者名 松田登紀	4．巻 17
2．論文標題 教育当事者としての小学4年生が語る「小学生になること」－幼小移行期を振り返り「小学生になること」をどう意味づけるか－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育システム研究	6．最初と最後の頁 13,24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 松田登紀	4．巻 17
2．論文標題 対象に思考をめぐらせ、自己を理解するツールとしてのICT	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育システム研究	6．最初と最後の頁 95,103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

幼児教育におけるカリキュラム・マネジメント http://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/_research/2021ondemandogaiyou.pdf 遊びになるということ http://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/_research/20210802AM%20kakudai.pdf
--

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------